

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI

とさぶし



No
28



TAKE FREE

文学の
世界へ

ノスタルジックな



高知の文学者が綴った名作

平成

文学が多様化、サブカルチャーとの融合も進む
時代小説からミステリーまで、作品が多様化し、メディアや漫画、サブカルチャーなど、従来の垣根を越えて新しい文学作品を創造しようとする作家たちが出現。有川ひろ、畠中恵、志水辰夫、山本一力、藤原緋沙子、中脇初枝など、高知出身作家が活躍している。

昭和

郷土を題材にした作品や女性作家の作品が話題に
海と山に囲まれた高知の風土は、文学作家の作風にも大きな影響を与えたと考えられる。郷土を題材にとった作品も多く発表された他、各ジャンルを確立した県内出身の女性作家の活躍にも目覚ましいものがあった。

大正

土佐の反骨精神が大衆文学の流行を牽引
明治の終わりから大正時代にかけて、高知でも大衆文学が台頭。高知出身の探偵小説家や大衆小説家が、全国の文学シーンで活躍した。彼らに共通するのは、郷土に由来する「いごっそう」「はちぎん」の反骨精神だった。

明治

自由民権運動が高まり新進気鋭の作家が登場
土佐で発祥した自由民権運動の高まりを受けて、数多くの文学的な発言がなされるようになり、小説、新体詩、漢詩、評論、和歌、俳句など多岐にわたって新進気鋭の作家が登場。また高知には、西欧の先進的な思想を紹介する人物らも現れた。

山本一力の直木賞受賞作「あかね空」映画化

作家として活動する前に旅行会社社員やコピーライターなどを務めた豊富な人生経験を活かし、江戸時代を舞台に人情味あふれる時代小説シリーズを多く発表している山本一力。直木賞を受賞したベストセラー「あかね空」は、2007年、中谷美紀主演で映画化もされた。近年では現代ミステリーのジャンルでも作品を執筆し、活躍している。



倉橋由美子の「PARTY」女流文学者賞を受賞

現在の香美市土佐山田町出身の小説家。デビュー作「PARTY」が女流文学者賞を受賞するなど大きな注目を浴び、以後、実存主義文学の影響を受けた作品を発表した。古典や神話などを題材にした優れた作品や、サンレーテグジュベリ「星の王子さま」の翻訳などでも評価され、時代を先取りした作風は、10年早い作家と言われた。



能文家、評論家・大町桂月が名を馳せる

酒と旅と自然をこよなく愛し、能文家、評論家として名を馳せた大町桂月。「桂月」の作家名は、よさこい節にも歌われる桂浜の名月に因んだもの。数多くの紀行文を執筆して自然美を伝えたほか、青少年の指導にも注力した。「文章は人格なり、己を欺くなかれ」という言葉を残している。



中江兆民がフランスの近代思想を日本へ

フランスの近代思想家・ルソーの「民権思想」を日本へ伝えた中江兆民は、「東洋のルソー」とも呼ばれる思想家。すべての人には天から授かった人権があると説き、政治家としても活動。ガンにより余命1年半と宣告された後に発表した「一年有半」では、政治、経済、社会、文化をひろく批評した。



有川ひろの作品が続々とアニメ・映画・ドラマに



ライトノベルのジャンルでデビューして以来、一般向けの文芸作品にも活動ジャンルを広げ、若い世代を中心に多くの読者から支持を受けている。代表作「図書館戦争」シリーズをはじめ、多くの作品がアニメ化や映画化、ドラマ化されている。自身の出身地である高知県が舞台のエッセイや小説も発表しており、その思いを読むこともできる。

芥川賞受賞作家・安岡章太郎が多くの読者を魅了



戦後、病を抱えながらも執筆を開始した安岡章太郎。「悪い仲間」「陰気な愉しみ」で芥川賞を受賞。母の死を題材に描いた「海辺の光景」などの小説や、ユーモアあふれるエッセイでも読者を魅了し、「第三の新人」の旗手として活躍。晩年に描かれた「流離譚」では、時代と人間の関わりを綿密な検証と深い洞察をもって表現した。

物理学者・寺田寅彦が古典的作品でも功績



科学、芸術、文学、各分野において人物の本質を見抜く直感力を発揮した寺田寅彦。地球物理学や気象学などの分野で功績を上げた物理学者でありながら、夏目漱石らによって文学的な才能を開花されたこともあり、詩心と科学精神が一体化した古典的作品群を数多く残した。「天災は忘れた頃にやってくる」などの名言でも知られる。

社会主義を広く説き、幸徳秋水が活躍



幸徳秋水は、現在の高知県四万十市出身の思想家。日本に社会主義の思想を紹介した第一人者であり、彼の作品「社会主義神髓」は、当時の社会における貧富の格差の原因や、生産手段の公有化を訴えながら、社会主義とは何か、人々に分かりやすく説いている。大逆事件に巻き込まれ、その人生を終える。

H
28

熊本地震が発生。

H
23

東日本大震災が発生し、死者・行方不明者あわせて1万8000人以上。福島では原発事故も発生した。

H
20

リーマン・ショック。世界的な金融危機が発生し、日本も大不況に陥る。

H
14

サッカー日韓W杯が開催。日本代表は初のベスト16に。

H
8

ボケットモンスターが大流行。ゲームやアニメなど、様々な展開を見せ、世界中に広まる。

H
7

阪神・淡路大震災が発生。また同年、地下鉄サリン事件が起こる。

S
60

男女雇用機会均等法が成立。男性労働者と女性労働者の差別が法律で禁止される。

S
44

学生運動が過激さを増し、「東大安田講堂」では攻防戦が行われた。

S
39

東京オリンピックが開催。日本は金メダル16個を含む、29個のメダルを獲得した。

S
26

サンフランシスコ講和会議で吉田茂首相が平和条約に調印。

S
20

女性の参政権を獲得。翌年の選挙にて、日本初の女性代議士が誕生する。

S
14

第二次世界大戦が勃発。多くの国民が軍隊に徴兵されたほか、学徒・女性の勤労動員も。

T
15

1冊1円的全集シリーズ「円本」がフームに。庶民が廉価で読書を楽しむ。

T
14

日本で初めてラジオ放送が開始。この年、大衆娯楽雑誌「キング」が発刊。50万部を超える発行部数を記録。

T
12

関東大震災が発生。死者・行方不明者は10万人を超えた。

T
3

第一次世界大戦が勃発。特需により日本は好景気となるが、その反面、戦後は不景気へ。

T
元

「日本活動写真(日活)」が創業。時代劇を中心に映画が大流行。

M
43

日露戦争が起こり日本が勝利。その後、アジア唯一の資本主義国として成長。

M
37

大日本帝国憲法が公布。翌年には第1回総選挙が行われ国会が開議。

M
22

板垣退助が日本最初の全国的自由主義政党「自由党」を結成。総理となる。

M
14

板垣退助らが民権議員設立の建白書を提出。これを契機に自由民権運動が始まる。

M
7

「藩」を廃止して「府」と「県」に一元化。

M
4

新政府は江戸の地名を東京に改名。翌年東京が首都に。

M
元

新政府は江戸の地名を東京に改名。翌年東京が首都に。

日本の歴史

明治

自由民権運動にその身を投じる高知の若者達は文学を通じて「自由」に対する理解を訴えた

近代文学のあけぼの時代。近代文学としての概念はまだ確立されておらず、政治運動の手段の一つとして、政治的思想を伝えるための書物が世の中に溢れた。そこに、近代文学の先駆けとして新たな息吹を吹き込んだのが、自由民権思想を主張する高知の若者達だった。

響など知る由もなかった。その当時、外国小説を通して自由民権思想を伝えようと試みた「翻案小説」で一世を風靡した、宮崎夢柳も高知の文学者の一人。彼はフランス革命やロシア虚無党を題材にした翻案小説を発表し、自在なスタイルで注目を集めた。これらの翻案小説もまた、近代文学に大きな影響をもたらしている。

また、明治中期に創刊された「高知新聞」の初代編集長・坂崎紫瀾は、歴史的人物を通して明治の新しい理想を描いた政治小説を執筆。彼の手がけた「汗血千里の駒（かんけつせんりのこま）」は、自由民権思想を多くの国民に伝えると同時に、維新の英雄・坂本龍馬を初めて世の中に広く知らしめた小説として、後の龍馬



汗血千里の駒

●かんけつせんりのこま
坂崎紫瀾により執筆された、坂本龍馬の生涯を描いた小説。第1次龍馬ブームのきっかけとなった作品。



ナレーター
学芸員・川島禎子さん

筑波大学の博士課程で文学を専攻し博士号を取得。「古い認識を改める」明治文学の世界を愛して止まない。

土佐の山間から自由を主張 筆の力で世の中を変えられると信じて

近代文学の夜明けとも言

われる明治初期、国会も憲法もなく、国民に重税が課せられていた時代。国民が政治に参加し国をつくりあげていくと訴える、自由民権運動が世の中を席巻。高知県は「自由は土佐の山間より」と詠まれた通り、自由民権を訴える若者たちで溢れた。武力による反乱が政府によつてことごとく制圧されていく中、自由

民権運動は言論による運動を中心に発展。若者は筆の力で世の中を変えられると信じ、政治に無知な人々に解りやすく伝える手段として、新聞を始め政治小説や翻訳小説を数多く執筆した。

自由民権運動の主導者・板垣退助の片腕となつて活躍した、自由党の理論的指導者・植木枝盛は、民権派ジャーナリストとして、巧みな演説と詩などを通して独学自習で人間の自由や平等を主張。それまで日本になかった概念を伝えるべく、丁寧な書き言葉で綴るのが主流だった文章を、柔らかな話し言葉で表現した。これが、後の近代文学に一石を投ずることとなるのだが、当時はまだ、そこに文学という概念はなく、後世への影

伝記にその内容が脈々と受け継がれているという。

「江戸幕府が倒れ、新しい時代をつくろうと立ち上がる人々で溢れた時代、自由民権思想に感化された多くの若者は、武力ではなく思想で世の中を変えられると信じて筆を執りました。若い人々が自分たちの可能性をひたすら信じ、自らの手で世の中を良くしていくという高揚感の中にいたのではないかと思えます。近代文学というものが影も形もないこの時代に、高知の人達は現代の文学につながる重要なポジションにあつたんです」。明治の文学を熟知する学芸員の川島さんは、若者の理想が生きていたこの時代を熱心に語ってくれた。



自由の凱歌

●じゆうのかちどき
フランス革命を舞台にしたアレクサンドル・デュマの原作を宮崎夢柳が翻案した政治小説。



自由詞林

●じゆうしりん
日本近代詩のさきがけとなった民権詩歌「自由詞林」。植木枝盛により口語体で執筆されている。



宮崎夢柳（みやざきむりゅう）

演説より小説執筆を重視した民権家。和漢洋の語学の才能を持ち、土佐藩主・山内内容堂にその才能を愛された。



坂崎紫瀾（さかざきしらん）

高知新聞の発行とともに編集長となり、自由民権運動を推進。公の場で「フルータス伝」を口演し禁固刑に。



植木枝盛（うえきえもり）

弁舌の才や頭の回転の速さ、執筆力にずば抜けており、自由党の理論的指導者として功績を残した。

代表作家

in 明治

1912

1868

大正

主流を逸脱した高知人の自由な発想が
鬼才・江戸川乱歩を世の中に輩出！

文学が一部の富裕層から、不特定多数の大衆へと広がりをもせた大正時代。主流に対して物申す高知人の自由な発想と反骨精神は、発展途上の日本文学に大きな影響を与えた。江戸川乱歩ら天才小説家を世の中に輩出したのも、また高知のジャーナリストだった。



学芸員の福富さんは、乱歩と

味深いです」。

新青年

森下雨村が初代編集長を務めた雑誌。大正ロマンが香る独特な表紙デザインがノスタルジックでいて新しい。

人の創作であろうかということだった。(中略)たしかに立派な作品だ。がまだ日本人の創作で日本にこれほどの傑作が生まれるはずがない」と。一方、原稿の返事を手紙で受け取った乱歩は「この手紙を受け取った私の気持ちは、学校の成績が一番と発表された時の喜びに似て、その晩は興奮のために不眠症になって、あれやこれやと愉しい妄想に耽ったことを覚えてい」と綴っている。

涙香の繋がりにについても教えてくれた。「乱歩は、大正時代に涙香の描いた小説『幽霊塔』にいたく感銘を受け、リメイク版の『幽霊塔』を執筆しているんです。昭和時代に描いた乱歩の『幽霊塔』に憧れて、今度は宮崎駿が『カリオストロの城』を創っているんです。涙香がルーツとなつて乱歩に繋がりが、そして平成の宮崎駿へと繋がっていく。時代を超えて繋がる文学の世界は知れば知るほど、とても興味深いです」。



幽霊塔

黒岩涙香の幽霊塔(下)と、それをもとにリメイクされた江戸川乱歩の幽霊塔(上)。



学芸員・福富陽子さん

江戸川乱歩を題材にした企画展を開催するなど、独自の観点から、大正時代の文学者の功績を伝えるために活躍。

新時代を拓いた高知の先人 ～文学は富裕層から大衆へ～

書物を用いて発信するとい

うジャーナリズムが見直され、新聞の創刊が相次いだ明治時代。高知出身の黒岩涙香により東京で創刊された新聞「万朝報(よろずちようほう)」が、東京を席巻。政治や社会の腐敗を暴いた記事を始め、政治家を戦々恐々とさせるスクandal記事など、様々な社会の出来事を簡潔・明瞭・痛快に表現した内容が読者を魅了した。万民が手に取りやすい安価な価格も手伝い、最盛期には1日の発行部数が25万部を突破し、東京で第1位を記録。大衆新聞の先駆けとして、日本の新聞史に大きな足跡を残した。読者が一部の富裕層から、不特定多数の大衆へと広がりをもせた大正時代、編集者は「いかに読者を毎号楽しませて新聞を買ってもらうか」を

追求し、進化の道をたどり始め

る。そんな中、涙香は、読者の探究心をついた探偵小説でも大衆を釘付けにした。日本の文学が発展途上の中、外国小説をもとに翻訳し独自のアレンジを加えた翻案小説を新聞に連載。推理や謎を含ませ惹きつけることで愛読者を増やしていく。

その流れを受け継ぐように、同郷の森下雨村もまた、探偵小説の発展に貢献。雑誌界に新時代を切り拓いた「新青年」の初代編集長を務め、海外探偵小説でファン的心を掴む傍らで、大衆より作品を公募し作家を志願する若者らに門戸を開いていく。その一人に、鬼才・江戸川乱歩がいた。雨村は乱歩の原稿を初めて読んだ時のことをこう記している。「真つ先に浮かんだことは、これが果たして日本



森下雨村(もりしたうそん)

「新青年」の編集長として、雑誌界に新時代を切り拓き小説家を志す若者らに創作の舞台を提供。情に厚く権力を嫌った日本探偵小説の父。



黒岩涙香(くろいわるいこう)

社会悪を徹底的に追及する態度と、持ち前のバイタリティで世の中を席巻した大衆文学のバイオニアであり、日本の探偵小説家の元祖。

代表作家
in 大正

1926

1912

昭和

痛みに耐え自身の身の上をさらけ出してまで
作家らは筆を執り作品を描き続けた

男性社会において女性の価値が問われた時代、男勝りに描くことに生涯を捧げた女性がいた。歴史に残る人気作家・宮尾登美子は、描くことをこう書き記している。「人の心を打つ作品を生むには自分自身血を流し、痛みに耐えながらその姿を人前にさらす勇気がなくてはならぬ」。

でも、結局は自分を描くことしかできないものなのだ」と言葉を残している。大原が描いた時代や運命に翻弄されながらも生きるヒロインの姿は、彼女自身だったと言える。

その活躍が記憶に新しい作家と言えば、宮尾登美子だろう。昭和37年に女流新人賞を受賞した後、不遇の時代を経て開花、太宰治賞、女流文学賞、直木賞など、数多くの文学賞を受賞。作品に描かれたヒロインの多くは、明治・大正・昭和と、日本の古い伝統に抑圧されながらも耐えて生きた女性。作品「權」では、母を主人公とし、芸妓や娼妓の紹介業を営む家に生まれた自分の出生について余すことなく綴っている。当時の風景や風俗の細やかな描写が筆1本で表現されており、物語の中の情景があざやかに脳裏に浮かび上がる。また、下火になっていた東映映画に新たな流れを作った「鬼龍院花子の生涯」や、大河ドラマ「篤姫」の原

作として知られる「天璋院篤姫」は小説に端を発し、舞台・映画・テレビへと、時代を超え観るものを惹きつけて止まない。

学芸員の岡本さんは彼女の作品をこう語る。「昭和の圧倒的な男性社会の中で、若い女性が当たり前に売り買いされていた戦前の生々しい情景や、男性に支配された家庭で抑圧されてつかえる女性の生き様を描いた宮尾さんの作品から感じることは、目に見える強さを表現することはなくとも、芯に強さを秘めた女性のあり方です。戦前の高知の風景や風俗についての情景描写から読み取れる戦前戦後日本の物語に、読むほどに胸がしめつけられます」。



婉という女
●えんというおんな

毎日出版文化賞・野間文芸賞を受賞した大原富枝の作品。時代や運命に翻弄されながらも生きる女性を描いた。

執行猶予
●しっこうゆうよ

12年間材料を集めて構想を練り、描き始めるや否や、わずか1カ月で完結。直木賞を受賞した小山いと子の代表作。



1989



權
●かい

母を主人公に、戦前の昭和初期の高知の花街の情景をも丹念に綴った宮尾登美子の作品。全て手書きで綴った生原稿が文学館に展示されている。



ナレーター
学芸員・岡本美和さん

「宮尾登美子 八十八年の生涯」を編集する中、様々な作品を熟読。宮尾文学に精通する学芸員の一人。

「女性は女性らしく」と言われ女性が表に出られなかった古き時代は流れ、虎視眈々と力を蓄えていた女性らが、次々と躍進した昭和の時代。それまで男性主体だった出版界に、男女対等な評価を求める女性らが「女流文学者賞」を創設、文学シーンに新たな風を吹かせた。それにもれず、高知のはちきん作家らも出版界に台頭。作家自身の身の上をさらけ出してまでも、

自分の筆1本で生きていくという心意気を感じさせる、女性作家の活躍が目立った。

その先陣を切ったのが、男性に負けじと社会的問題を取り上げ、男女対等のスタンスを貫いた作家・小山いと子だ。有名な「ダム・サイト論争」では、男性作家を相手に一步も引かず、女性の芯の強さを見せつけた。彼女にとって筆を執ることは、威圧的な父親や夫に対する反発でもあった。

本山町にある「大原富枝文学館」の存在でも知られる大原富枝は、結核と共に生きた作家。療養生活の中で筆を執り、「書くことは生きること」と生涯を執筆活動に捧げた。また、自身のベストセラー作品「婉」という女」において、「作家はいつの時代、いかなる人物に素材を借り



宮尾登美子(みやおとみこ)

日本の風土や古いしきたりの中で生きる女性の姿などを描き続けた。その多くの作品が映画化・舞台化されている。



小山いと子(こやまいとこ)

綿密な調査に基づくスケールの大きい作風が特徴。女性の生き方を正面からヒューマニズム豊かに描いている。



大原富枝(おほはらとみえ)

女が生きることを時代や社会問題にまで迫って描写。女性の豊かな情感と社会的視点が高く評価されている。

代表作家
in 昭和

はちきん作家が一世を風靡 生涯を執筆活動に捧げた女性達

1926



有川ひろ「旅猫リポート」2018年映画化
 辻堂魁「風の市兵衛」シリーズの「修羅の契り」2018年NHKドラマ化
 中脇初枝「きみはいい子」2015年映画化
 藤原緋沙子「藍染袴お魁帖」シリーズの「風光る」2010年NHKドラマ化
 門田隆将「死の淵を見た男」2020年映画化決定

するという新たな流れが業界内に生まれている。

また、「高知出身の作家は高知を題材とした作品を手掛けることも多く、とても郷土愛を感じるんですよ」と学芸課長の津田さんは言う。その言葉通り、高知県庁を舞台とした有川ひろの「県庁おもてなし課」、ジョン万次郎の生涯を描いた山本一力の作品「ジョン・マン」、藤原緋沙子が坂本龍馬の恋人を主人公に描いた「龍の袖」など、作品を通して高知の事や歴史を伝えている作品は数えきれない。

「活字は映像化されたものと違って、読み手自らに想像させるといふ力があるんですね。ゆえに、創造力を育むんです。入り口は、映画やテレビでも良いから、最終的には活字にたどり着いてもらいたい。そのためにも、文学の面白さを多角的に伝えていくのが文学館の使命だと思っています」。津田さんは「高知県立文学館」設立か

多ジャンルとコラボし文学も多様化 他メディアを入りに文学の世界へ

文学作品の映画化、テレビドラマ化などが相次ぐ昨今、他メディアを入りに文学作品へと原点回帰。活字離れが進んでいると言われる文学シーンに新たな流れが生まれている。映画化されて高知が一躍脚光を浴びた有川ひろの「県庁おもてなし課」は記憶に新しい。



ナビゲーター
津田加須子さん

20XX

平成～令和へ

ら22年、学芸員として高知ゆかりの文学の魅力を伝えてきている。そんな津田さんお薦めの二冊を最後にこっそりと教えてくれた。

「自分が生かされているんだという認識のもとに、どういう状況下におかれても、自分が自分なりに生涯を全うする、一生懸命に生きている姿を描いた作品が好きなんです。有川さんの旅猫リポートは好きな作品の一冊なんですよ。心優しい青年とツンデレな猫が旅をする物語なんです。与えられた命を大切に生きる主人公の姿は、私達に生きる力を与えてくれます。若い方ぜひ読んで頂きたいですね」。

県庁おもてなし課

高知県庁に実在する「おもてなし課」を題材にした有川ひろの小説。2011年発売され、2013年に錦戸亮の主演で映画化。全国で大ヒット上映され、高知が一躍注目を集めた。

郷土愛溢れる 話題作続々 ～活字の世界へ再び原点回帰～

新聞・雑誌・小説が一世を風靡した文学の最盛期は過ぎ、活字を追うという習慣が薄れる中、文学はテレビ、映画、舞台、漫画、サブカルチャーなどと連携し多様化。平成の時代は、従来の枠を超えて新しい世界を創造しようとする作家の活躍が目立った。高知出身の現代作家も十人十色独自のヌ

タイルで躍進。映像化されている大衆向けの作品も多く見られる。中でも代表的な作家の一人、有川ひろの作品は「県庁おもてなし課」「図書館戦争」「阪急電車」「旅猫リポート」などたくさんの作品が映画化。映画をきっかけに原作を手にする人達も多く、別媒体を入りに、活字の世界へと原点回帰

1989



絶景にて
人と出会う

Spot
06

人と自然をつなぐ場所

黒尊溪谷

「日本最後の清流」としても名高い、高知県西部を流れる四万十川。

その支流の中でも最も透明度が高いと言われる黒尊川は、紅葉の名所としても知られている。

毎年11月頃になると鮮やかに色付いたカエデやモミジが溪谷の澄み切った河面に映え、

息をのむような美しい光景が広がる。

高知県西部と愛媛県との県境に位置する黒尊神殿橋周辺は、紅葉シーズンになると多くの観光客が訪れる。溪谷にせり出すように色濃く染まった木々、溪流に落ち葉が浮かぶ様子はまさに絶景。その景色をより美しく演出しているのが「平成の名水百選」にも選ばれるほど透明度が高く、鮮やかな紅葉を映し出す黒尊川だ。ここには、川釣りやうなぎ漁、川遊び、野菜の栽培や稲作風景など、日常的に自然と共存する暮らしが今でも残っている。

自分で体感することで自然との関わりを知る 興味の幅が広がる場所

昔ながらの営みが残ったこの地域の貴重性や魅力をより多くの人に伝えようとする取り組みが川村さんだ。普段は川の文化・風景を守るため文化行政に携わる傍ら、休日にも川へ足を運び水中を観察。「黒尊川ではテナガエビやアユ、ボウズハゼなどのめずらしい生き物が今でも生息し、行くとたびに色んな発見がある。川が狭く浅いので子どもと一緒に自然を体験しながら学ぶには最適な場所ですよ!」とその魅力を楽しそうに話す。

そんな魅力いっぱい黒尊川をPRするために制作したのが、川の流域を全長2mほどの地図にして、季節のパフレットと共に折り込んだ「くろそん手帖」。開くと中はほとんど白紙で、川を訪れて実際に体験したことを絵に描いたり写真を貼って楽しむことができ、何度も来なくなるような仕組みが施されている。また、手帖を通して地元民と観光客との会話が生まれたり、実際に書き込まれた手帳を集め展覧会を行い、大人と子どもそれぞれの楽しみ方を共有したり、コミュニティのツールの一つとしても役買していると言う。

「誰かと出会った記憶は綺麗な景色にも負けないくらい深い思い出として心に残ります。ぜひ訪れた際にはこの素晴らしい自然と一緒に暮らす人と関わることで、この場所の豊かさを感じてもらえれば...」。今では貴重となった原風景はどこか懐かしく親しみを感じるもの。旧来の自然と人との関わりを知ること、日常では知り得ない大切な何かを感じてもらいたい。

眺めるだけじゃもったいない!
実際に川に入って体感して



四万十市生涯学習課
社会教育振興係長
川村 慎也さん

発掘調査がきっかけで18年前に県外から高知へ移住。現在は四万十川の文化・風景の保護、フィールドワークなどを行いながら様々な景色を撮影している。今年の2月にリニューアルした「四万十市郷土博物館」には川村さんが撮影した黒尊溪谷の紅葉の写真も飾られた。

津野山神楽

●高知県高岡郡梶原町川西路 三嶋神社
●10月30日(水)

毎年秋の神祭が行われる2日目の30日に、五穀豊穡や無病息災を願って執り行われる津野山神楽は、国の重要無形民俗文化財にも指定。三嶋神社をはじめ、梶原町内の6つの地区で行われている。



東洋町流鏝馬

●野根八幡宮10月6日(日)・春日神社宮10月15日(火)
※流鏝馬の行事は14時～、雨天中止

東洋町の野根八幡宮、春日神社宮大祭行事の1つとして、鎌倉時代に発祥したと言われている五穀豊穡を願う伝統行事。祭りでは東洋町の郷土料理「こけら寿司」の販売も行われる。



千年以上前より 伝わる

毎年10月30日、三嶋神社では年に一度の大祭で「津野山神楽」が行われる。起源や歴史は定かではないが、913年に藤原経高が津野山郷へ入国し、三嶋神社を勧請して守護神として祀られた頃より、神職によって歌い・舞い継がれてきたと言われている。日本が終戦を迎えた頃には、神楽修得者が減少し神楽の存続が危ぶまれたこともあったが、1948年、地元の人達の想いによって設立した津野山神楽保存会が継承。1980年には国の重要無形民俗文化財に指定され、現在も県内外より多くの人達が訪れ、賑わいを見せている。この津野山神楽、正式にすべて舞い納めるには、舞い始めの「宮入」か

農民たちの祭り

疾走する馬上からの流鏝矢(かぶらや)を射る「流鏝馬」は、日本の伝統的な騎射の儀式。馬を馳せながら矢を射ることから「矢馳せ馬(やばせうま)」と呼ばれていたことが名前の由来とされている。古くは、農耕馬と共に生きる農民にとって、五穀豊穡を願う年に一度の大切な行事であったと伝えられており、当時の子ども達は、目を

伝統を守るため

疾走する馬上から騎手が矢を射るという、迫力満点の儀式だが、走りながら的を射抜くのは至難の業で、もちろん当たる確率は非常に低い。それでも、毎年「流鏝馬」を一目見ようと遠方より訪れるファンは多く、「この行事のために遠くから見

次世代へ繋げたい

祭りが始まると、辺りはおこそかな雰囲気包まれ、太鼓やすり鉦、笛で奏でるテンポの良いお囃子が聞こえる中、歴史を

古き良き伝統文化を後世に伝えるべく奔走する祭り人達の想いや胸の内にせまる！

語り継ぐ



にきてくれる人のことを思うと、どんなに苦労があっても頑張りたいたいと思う」と主催者の生田さんはこの祭りにかける想いと苦労話を聞かせてくれた。生きた馬を相手にするため安全面に十分な配慮が必要で主催者側の苦労も多く、後継者の不足により開催が途絶えていた時期もあった。それを今中心となつて支えている生田さんは、的を射るのに使われる矢も自らが手掛けるなど、ひたすら地道に伝統を継承し続けている。「しっかりと作っていないと射つた時に矢が壊れて抜けてしまうので神経を使うんですよ」とその大変さを漏らしながらも、「自分が出来る限り続けたい」と語る。そんな生田さんの強い思いが次世代へと繋がることを願うばかりだ。

感じる上品な舞いが披露され、観るものを虜にさせる。津野山神楽保存会の事務局局長・川上さんは「津野山神楽のお囃子は、太鼓の音が独特でリズムが良く、ジャズとセッションしても合うほどノリが良い」と自慢気に祭りの魅力を語る。そんな一方で、千年に及び継承されてきたこの大祭も、現役の神楽修得者が高齢になり、後継者不足の壁にぶつかっているという。「神楽を舞う若者を育てるためにも、まずは津野山神楽を見に来て、魅力を感じてもらいたい」。梶原町民が受け継いできた津野山神楽をこれからも守っていけるよう、川上さんらの活動は続く。

津野山神楽保存会の事務局局長・川上さん

「東洋町流鏝馬保存協議会」会長・生田剛男さん

LINE@でも
情報配信中！



① QRコードを読み込み「とさぶし」と友達になる



② 記事の閲覧やプレゼント応募、最新情報を受け取れる



かつては身動きもとれないほど盛り上がったもう一つの日曜日

土佐山田の平成日曜市は、高知市から東へ車で約30分ほどの距離にある香美市土佐山田町で、50年以上にわたって続けられてきた曜日市。広々とした物部川流域で生きる生産者や地域住民の生活市として、かつては高知市の日曜日にもおとらぬほどの活気と賑わいをみせていた。出店者組合で現在理事長を務める吉岡光洋さんは、「20年ほど前の最盛期には、出店者は150店以上で、来場者も1日で2000人は超えてたね。あんまり人が多いき、会場で身動きがとれなかった。トイレも行けんくらいやった」と、当時を振り返る。現在の出店者は21店。地域の高齢化に伴い減少しているが、それでも、半生とも言えるほどの長い時間を共に過ごしてきた売り手と買い手がともに



生きる温かいコミュニケーションとして、今日も続いていく。

土佐山田町の油石地域で農家を営む吉岡さん。お米を始め、ナスやきゅうりなどの野菜を栽培。「馴染みのお客さんも皆お歳をとった」と話す。



西村さんは高知市在住。若い頃からこの市に出店し続け、現在はお煎餅などのお菓子を主に地元名物の水飴「りょうせん」も置く。



土佐山田町の油石地域で農家を営む吉岡さん。お米を始め、ナスやきゅうりなどの野菜を栽培。「馴染みのお客さんも皆お歳をとった」と話す。



お茶や漬物を販売している依光さん。かつては茶農家だったが高齢で続けられなくなり、いまでは美味しいお茶を仕入れて販売するようになった。



会場の壁面には土佐山田町近辺にあるお店の大きな看板が隙間なく並び、かつての来場者の多さを伺い知ることができる。



昔馴染みの売り手と買い手が挨拶を交わしながら買い物をする市。屋根がある会場で涼しい風も吹く。

今回のテーマ
市の歴史に触れて
地元懐かし
の田舎寿司!
Autumn

日曜日のTOSALシビ

物部川流域で生きる人々の生活市「土佐山田 平成日曜日市」。かつての盛り上がりを感じながら老舗仕出し屋さんの地元寿司を味わう!

受け継がれていく市は新たにやつてきた人達や若い学生が活躍する場

そんな土佐山田の日曜日市も、先代からお店を受け継いだり、あるいは移住でこの地に新たにやつてきたりした新しい人達によって、その歴史が続けられている。土佐山田町には高知工科大学があるため県内外から若者も多く訪れており、「日曜日活性化サークル」に所属する大学の生



生、坂田くんは、いろいろな学生サークルが参加するイベント「おはまる市」で、今年も市を盛り上げます!」と元気に話す。高知商業高校の生徒たちも、この地域で問題になっている獣害を解決するため、地元産のジビエを用いた商品を販売しながら、「若者のパワーで笑顔になってほしい!」と、とっても元気。土佐山田の日曜日市は、長い歴史を持つ地域コミュニティであり、志ある若者の活躍の場でもある。

「いろいろな学生サークルが参加するイベント「おはまる市」で、今年も市を盛り上げます!」と元気に話す。高知商業高校の生徒たちも、この地域で問題になっている獣害を解決するため、地元産のジビエを用いた商品を販売しながら、「若者のパワーで笑顔になってほしい!」と、とっても元気。土佐山田の日曜日市は、長い歴史を持つ地域コミュニティであり、志ある若者の活躍の場でもある。



高知商業高校の学生が企画した「シカ肉入りカレーライスパン」。ジビエのシカ肉に地域の産米も使った美味しいカレーパン。



高知工科大学の学生、坂田くん。「ゆくゆくは若者と地域のお年寄りの方々が「おきやく」のように交流できる場を作りたい」と話してくれた。



30年ほど前に千葉県から香美市香北町に移住した「メリージェンファーム」の手作りパンを中心に、無農薬のブルーベリーなどを販売。



南国市在住の小野寺さんは、祖母の代から出店する3代目。足を運び続けてくれるお客さんに感謝の気持ちをつねに持っていると言う。



土佐山田の名物「姫いち寿司」のレシピを教えてくださいました「よし本仕出し店」の吉本小夜さん。家の祭事などでふるまう田舎寿司などを、30年以上にわたって地元住民へ届けてきた。日曜日市にも出店している。

地元民が懐かしがる!

姫いち寿司

材 料

ヒメイチ.....6匹
しょうが.....20g
ゆず酢.....20g
お米.....1合
砂糖.....小さじ一杯
塩.....小さじ一杯
ごま.....少々



手順1

白米を炊き上げたら、ゆず・しょうがをふりかけて合わせ、寿司飯をつくる。

手順2

ヒメイチにうす塩をふりかけて1時間ほど置き、臭みを取る。その後、塩を洗い流し、魚をおろして下準備をする。

手順3

骨を抜くなどの下準備ができたヒメイチを、さらにお酢につけて5分ほど置く。この一手間でヒメイチ本来の風味を出す。

手順4

すし飯と下準備をしたヒメイチでお寿司を握り、完成!



土佐山田町の日曜日市に出店している高知商業高等学校の高校生たち。高校生が考案した商品は、地域の課題を地域の元気に変えている。



ブライムトーク

土佐の文化を
受け継ぐ者たち

高知の風土に育まれた「土佐人」たちは
今日もそれぞれの分野から「土佐の風」を発信
そこに新たな文化を重ねながら



竹村活版室代表

たけむら あい

竹村愛さん

【プロフィール】

美術短大を卒業したあと、京都と高知でグラフィックデザイナーとして活躍。高知の印刷会社に勤めた後、2011年に「竹村活版室」をオープン。自ら手がけた印刷物を通じて、温かみのある活版印刷の魅力を伝えている。

「活版印刷」とは、活字を組み合わせて作った版（活字組版）を使った印刷方法のこと。デジタル化の一途を辿る現代社会において、あえてこの昔ながらの印刷方法を用いて生み出される作品には、一つひとつに唯一無二の温かさが宿っている。

文字との出会い、師匠との出会い 導かれるように活版印刷の世界へ

幼少の頃から本が好き。と言っても、読むのではなく、そこに並ぶ文字の形を見るのが好き。他にも、教科書の余白部分に興味を抱いたり、習っていた硬筆では先生が書く文字が紙のつていく感じを見るのが好きだった竹村さん。今思えば当時から今の職業へと繋がる片鱗が少しずつあったことは間違いなし。そこから、デザインの分野に興味を抱くようになり、京都でグラフィックデザイナーと学んだ後、高知でグラフィックデザイナーとして働いていた。活版印刷に出会ったのはその頃のこと。「仕事で知り合った方にいただいた名刺が、普通の印刷じゃないことに気づいて。それが活版印刷で作られたものだったんです」。そして独自で活版印刷について調べていくうちに辿り着いたのが、高知市升形にある高明堂印刷（現在は廃業）。そこで、今でも「師匠」と慕う、西村さんに出会った。「最初はちょっと煙たがりましたが（笑）、とにかく通いつめて次第に打ち解けていき、いろんなことを教えてもらいました」。そんな中、当時の仕事にやりがいを感じていたものの「次のステージへ」と念発起。2009年に退社し1年の準備期間を経て、2011年2月「竹村活版室」をオープンした。

手間と労力をかけてでも伝えたい 活版印刷の魅力とは

「竹村活版室」があるのは高知市三園町。扉を開けると6畳ほどのスペースが広がり、カウンターを隔てた半分が作業スペース。そこには、大阪から取り寄せたという年代ものの印刷機や、師匠から譲り受けた活字、それをしまう棚など、年々を感じさせる道具がそこかしこに溢れている。とはいえ、全ての工程を昔ながらの方法で行うのではなく、作業の半分ほどはデジタルを併用しているのだそう。「まずはパソコンでデザインをおこして、そこから本番。活字を組み合わせていく作業が、一番時間と労力を費やします」。例えば、パソコン上ではキーボードひとつで入れられるスペースも、活版印刷の場合は文字と文字の間に込物（こめもの）と呼ばれる部品を入れてスペースを作る。しかもそれが全角か半角かはまたまたそれ以外の間隔によっても、使用する込物が変わってくるという。このデジタル化社会において、どうしてもわざわざ手間のかかる「活版印刷」を職業に選んだのか。「紙の上に文字がきちんとついている」ということを、物質的に感じられるところです。目にした時に、普通の印刷にはない温かみ、良い意味で違和感を感じるところも魅力です」。出会ってからというもの、活版印刷の魅力にのめり込む方で、仕事を通して出会った人々たちから刺激や気づきを経て、今新たな活路を見出している。



住宅街の中にある「竹村活版室」。軒下へ控えめに掲げられた看板は、活版印刷を思わせる「らしい」書体に温かみを感じれる。



印刷機は、埼玉県の永井機械製作所のもの。上の丸い部分にインクを塗って手前に紙を置き、レバーを引いて1枚ずつ印刷する。



「竹村活版室」の名刺と、その元となる版。余白の部分にも隙間なく込物が敷き詰められており「空白にも意味がある」のも魅力のひとつ。

出会い、気づき、発見 小さな世界をずっと大切に



FM高知で毎週金曜放送中のラジオ「ブライムトーク」に出演した際のスタジオの様子。竹村さんの出演回は、10/4、11の2週に渡ってオンエア。

竹村さんは活版印刷の仕事と平行して、ご主人のデザイナー・タケムラナオヤさんを含む県内のデザイナー3名とともに「土佐和紙プロダクト」を立ち上げ、土佐和紙の魅力や使い方を広げる活動を行っている。遡ること10年前、2009年に「いの町紙の博物館」で開催された「使える和紙展」の企画をご主人の事務所が請け負い、竹村さんもそこに参加したことをきっかけにこの活動がスタート。手漉き和紙を中心とした土佐和紙にデザインを施し、日常使いできる色々なものが生まれている。「普段1人で仕事をしているためか、作家さんやデザイナーさんと活動すると、自分では気付けなかったことに気付いたり、たくさん刺激を受けますね。そんな中で生まれたアイデアをヒントにこれからも作品を作っていきたいです」。土佐和紙に活版印刷と、昔からあるものに新たな息吹をもたらして、現在に伝えていく。そんなコアな世界で活躍する竹村さんが抱く今後の目標とは。「大きな夢や目標を追いかけるというよりは、紙や文字にまつわる、より小さな世界を大切にしていきたいです。活版印刷やその周辺のものごとの良さも伝えていけたらと思います」。

読者プレゼント

とさぶしからの贈り物

クイズとアンケートに答えて応募してや!

クイズ 明治時代「東洋のルソー」と呼ばれた高知の思想家の名前は?

たくさんの方の応募
お待ちしております。

「とさぶし」
からの
贈り物

応募締切
2019年12月20日

- 読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。
- プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
- いただきました個人情報はプレゼントの発送のみに使用します。

高知県立文学館

高知県立文学館
常設展示図録
「高知の文学」

2名様

高知県にゆかりがある作家や作品を紹介する、高知県立文学館の常設展。今回の特集を読んで、より深く高知の文学を知りたくなった方にオススメ。



3



高知県立文学館
大原富枝の犬グッズ 3点セット
(一筆箋、しおり、ポストカード)

10名様

大原富枝にちなんだ高知県立文学館オリジナルアイテム。大原富枝と共に過ごした愛犬「三郎」をモチーフに描いた一筆箋、しおり、ポストカードの3点セット。

2



高知県立文学館
寺田寅彦
珈琲 5パック

5名様

文学者、寺田寅彦をイメージした、高知県立文学館オリジナルのドリップ式コーヒー。深い味わいに文学者の涙みを感じてしまうかも!

1



寺田寅彦にちなんだ、高知県立文学館オリジナルアイテム。寺田寅彦が可愛がっていた愛猫「三毛」と「玉」をモチーフに描いた一筆箋、しおり、ポストカードの3点セット。

高知県立文学館
寺田寅彦の猫グッズ 3点セット
(一筆箋、しおり、ポストカード) 10名様

6



高知県立文学館
寺田寅彦いちご図ふろしき

2名様

高知県立文学館が所蔵している寺田寅彦の絵画、「いちご図ふろしき」を元に作成したオリジナルふろしき。生地はポリエステルちりめん、汚れにくく高級感のある手触り。



4



とさぶしLINE@と友達になって、
読者プレゼントに応募しよう!

- 1 スマホから左のQRコードを読み込んで、とさぶしLINE@と友達になる
- 2 とさぶしLINE@より「とさぶしからの贈り物」応募フォームが届く
- 3 応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしLINE@」への登録もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合はお名前・発送先のご住所・お電話番号・ご希望のプレゼント番号・クイズの回答をご記入の上、下記の宛先まで締切日(2019年12月20日)必着でお送りください。 〒780-0081 高知市北川添10-15 株式会社ぱっとこうち

地元の人達の生活に欠かせない 自然溢れる場所



地元の食材や
自然を活かした
魅力的な村♪

高知大学地域協働学部
岡 知佳さん

徳島県出身。高知県内の集活センターなどを
巡り、フィールドワークを中心に学ぶ日々。県内
の様々な場所を訪れるたびに高知愛が加速。
高知での就職も考え中!

離島を除いて日本人口が少ないここ大川村に、3年程前「大川村集落活動センター」結いの里」が発足。小・中学校や保育園、デイケアセンターへの給食の提供を行う傍ら、はちきん地鶏をはじめとする、大川村の特産品を生かした「おかあさん食堂」の運営や、農産物や加工品などの物販を行う。そんな大川村自慢の味は、ドライブがてらに訪れた人からも評判は上々。小さな村に生まれた新たな拠点として、美味しいグルメスポットとして注目を集めている。最近では「貨客混載」というコミュニティバスの運用も開始。地元の高齢者の足となり荷物の集荷を請け負い、地域の人たちから好評を得ている。「この施設を心の拠り所として頼ってもらえるような地元の人達の生活基盤の一部として、また村内外の人達が楽しめる場所として活かしていきたい」と会長の平賀さん。「自然豊かなこの場所を、村内外の人にもっと知ってもらいたいですね」と、岡さんも集活センターのあり方を改めて考えた。

大川村集落活動センター
結いの里

土佐郡大川村船戸239
☎0887-84-2233

美味しい野菜や肉など、地元でとれる食材を使って、地元の子どもたちを育てていきたいという思いから、給食の提供などを委託事業として請け負ったことをきっかけに2016年に発足。集落活動センター運営協議会の会員団体である「(一社)大川村ふるさとむら公社」が管理する「白滝の里」も、キャンプやBBQなどのイベント、スポーツをするにもぴったりな、「結いの里」と並ぶ人気スポット。



物販コーナーで人気なのは、大川村名産のはちきん地鶏。休日限定の「おかあさん食堂」では、地鶏を使った親子丼や、大川黒牛を使ったおにぎりなど、村自慢の食材の旨味を十分に味わえる。

大川村集落活動センター結いの里
会長 平賀洋司さん



A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI
とさぶし

web
リニューアル！
見てちゃ！

<https://tosabushi.com>



facebookもやってます！

<https://www.facebook.com/tosabushi>

発行

高知県文化体育スポーツ部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)

Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296

E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日:2019年9月30日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会

制作 ほっとこうち

バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送料分の切手を送っていただくと、
受け取り次第、発送をいたします。

【送料】※10月1日から適用

1冊 140円

2冊 180円

3冊 215円

4・5冊 310円

6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、

高知県文化体育スポーツ部文化振興課(上記)まで。



このパンフレットは宝くじの収益金の一部で
作成しています。

LINE@でも情報配信中！



とさぶし
と友達になろう！